

早山 隆邦

あなたの野心作が読みたい!

アジ研の町北研究員から、「最近の研究者は、論文は書くが単行本を書く気が薄い。本の作り手としてどう思うか」といふ下問を戴いた。「経済学単行本編集者」を僭称してきた身としては、由々しき事態だ。私は、八つつあん熊さんが横町のご隠居宅に飛び込む風情で、同じ建物に仕事部屋を持ち、一橋大学退官後再就職されず、たゆまずお仕事を本にまもめていられる斎藤修先生（経済史・歴史人口学）のドアを叩いた。「そうね、今の研究者は、特に経済の場合、評価の定まったジャーナルが複数あるから、評価・業績の為だけならそこに掲載されれば充分で、単行本をまもめる意味は少ないと思うでしょうね」とあつさり肯定なさった。「だから、単行本にまもめるといふ意欲には、何かしらの、アマチュアリズムが必要ですね」と。

かつて、私は、大学の研究室をアポもとらずに訪問し「何か御用はありませんか」と聞き廻って「犬棒」で仕事を得る「聞き込み刑事ご用聞き型」こそ醍醐味と教えられた。飛び込んだ先の先生も、「いつかまもめなくては」とか「先約がありますから」とか、断るにしても研究と不可分に書籍出版を前提にして下さったものだが、いまや「私は本を出す必要がありません」といわれるのだろうか。

「アマチュアリズム」という言葉で思い出したことがある。一九八〇〜八八年、ある研究会の事務方をつとめる僥倖を得た。(メンバーは原洋之介、斎藤修、白石隆、清水元、今岡日出紀、大西健夫、川勝平太、宮島博史、関本照夫、鈴木木、浜下武志、(順不同)等の方々。大沼保昭、土屋健治、二宮宏之氏も参会された。体面重視の小ぶりの発表は一つもなく、毎回最後は豪快に痛飲。このメンバーの一部のタイ旅行から出来たのが『東南アジアからの知的冒険』という本。よい遊びからも本は生れる)。一九八五年頃、二次会での「時間が許せば何を書きたいか」という雑談の最後にちよつと照れつつ言われた三〇歳代の白石隆さんの一言。「資料・史料を全て集め、絶妙に配置して歴史的出来事の全体を浮かびあがらせる書物を書いてみたいな、D・ハルバースタムのように」。研究者ではなく、ピュリッツァー賞受賞ジャーナリストを挙げられたあの言葉に本を書くという行為のチャレンジスピリットが集約されている。研究者の方々、どうか論文はほどほどに、知的でかつエントナーテインメント性もあり、歴史を迫体験しうる本を執筆して、私たち読書大衆を満喫させて頂きたい、それが出来る才を持ち、研究職という好位置にいらつしやるのだから。

最後に、およそ説教と対極にいる方の言葉なので引用するのが申し訳ないが、再度斎藤先生の言葉をお借りしよう。(論文がいくつもあるのだから)パテで繋ぐように間を埋めれば、単行本などいつでも出来ると思つている人に私は、じゃ、やつてご覧なさいというのです、視点や文体が微妙にずれ、自己矛盾さえ生じている事を発見すると思えますよ。勝手に忖度すれば、その苦勞を経て初めて研究という営みも彫琢されて仕上がるという事だろうか。

はやま りゅうほう / 書籍工房早山代表取締役

1945年生れ。慶應義塾大学経済学部卒業。筑摩書房、リプロポート、NTT出版を経て、現在 有限会社書籍工房早山代表。『社会科学の冒険』I・II期、シリーズ『民間日本学者』など担当。